

現代語訳

意志の力

安田善次郎

守屋淳
|| 訳

築き上げた資産は
国家予算の $\frac{1}{8}$

史上最強実業家

安田善次郎

が遺したビジネスと人生の
指南書をわかりやすく現代語訳化。

〈資産〉

安田善次郎 (1921年) 約2億円 (国家予算の12.6%)※1

柳井正 (2013年) 約1兆2370億円 (同1.3%)※2

孫正義 (2013年) 約8000億円 (同0.9%)※2

三木谷浩史 (2013年) 約5210億円 (同0.6%)※2



現代語訳

意志の力

安田善次郎

守屋淳二訳

星海社

45



安田善次郎とは、ひと言でいうならば、
「空気をあえて無視する力によって、空前の巨富を築いた男」
に他ならなかった。

なにせ一代で、国家予算の八分の一以上といわれる、とてつもない財産を築いてしまったのだ。単純な比較はもちろんできないものの、現代の予算規模に換算すればその額およそ十兆円以上。現代の柳井正や孫正義をはじめ、名立たる金持ちは古今に存在するが、そのなかでも図抜けた存在として輝いているのだ。

しかし、なにゆえに「空気をあえて無視する力」と「巨富」が結びつくのか。

たとえば投資でこれを考えてみよう。投資では、他人と同じに動いていても利益を得ることはできない。単純な話だが、みなが投げ売りに走るような時期に買い、みなが買いに回るようなときに平気で売れるようであればならない。

しかし、これは言うのは簡単だが、実行するのはきわめて難しい。

なぜなら、そこにはこの本のタイトルである「意志の力」が必要となるからだ。他人の動きや、世間の空気などをサクッと無視をして、自分の信じた道を貫き通す、そんな心の強さがなければならぬ。

現在のわれわれがこの本を読む意味も、実にここにある。

現代人は往々にして、仲間の空気を読みつつ、SNSなどで広がり続ける人間関係に配慮しつつ生きなければならなくなっている。言葉をかえれば、他人との関係にエネルギーを使いすぎてしまい、一つのこと突き抜けていなくなっているのだ。

たとえるなら、メダカやイワシの群れにはなれても、ワシやタカのようにはなれない——これは、ある意味でバランスが悪い生き方といっていだろう。人生には、メダカやイワシの群れのようななった方が生き残りやすい局面もあれば、ワシやタカのようにならないと生き残れない局面もある。

現代人の陥りがちなバランスの悪さを正してくれる思想として、「意志の力」はまさしく存在する。

ただしこれは裏を返せば、本書のメッセージがきわめてシンプルであり、かつ当たり前

の内容であることも意味している。なぜなら「意志の力」を持つことには、複雑なロジックもテクニクも必要ないからだ。

しかしわれわれは、当たり前だけれども重要なことを忘れていたり疎かにしてしまいがちだ。その結果として、本来手にすべき幸せや成果を取り逃してしまう。

「その当たり前はなぜ重要なのか」「なぜ忘れてはならないのか」——この再確認のためにも本書は読むべき価値がある。

一方で安田善次郎は、逆にこの「空気をあえて無視する力」を持ち過ぎることによって、不慮の死をとげてしまった一面も持つ。彼の生き方もまた、その意味ではバランスがよいとはいえなかった。

「意志の力」と「空気を読む力」という対極の力を、絶妙なバランスで活用したり、直面する状況によって向いている方を駆使する力を身に付ける一助として、本書を活用して頂ければ訳者としては望外の喜びである。

なお、本書は国立国会図書館のデジタル化資料『意志の力』を底本とし、安田生命保険相互会社より二〇〇〇年に配布された現代語訳の『意志の力』を参考としている。また、訳文における「主義」を「くが一番」と訳出したのは翻訳家・経済評論家の徳川家広さん

の知見をお借りしている。企画および編集の労をとっていただいた岡村邦寛さん、柿内芳文さんとともに記して感謝したい。

守屋淳

凡 例

• 本文は新字新仮名づかいに改め、明らかな誤記誤植と思われる個所は訂正したうえで、全編にわたって言い回しをより現代的に改め、ルビ、送り仮名、注釈を補いました。

• なお、底本にある表現で、今日からみれば不適切と思われるものがありますが、底本が刊行された時代背景に鑑みて原文のままとしております。宜しくご理解のほど、お願い致します。

意志の力



安田善次郎

1838 - 1921

まえがき 3

はじめに 15

第一章 学業や事業を成し遂げるには何が必要か 17

第二節 揺るがぬ志と努力 18

偉人に共通する特徴 18 / 揺るがぬ志と努力を備えた人物の承諾には、千金の価値がある 20 / 志がもろく、実行力のない者の共通点 22 / 天才の末路、鈍い人の成功 24 / 凡人が大成する一番の要素 26 / 本当の成功と朽ちない生命 28 / 天職の完成と意志の修養 30

第三節 揺るがぬ志の養成法 33

厳格だった家庭での訓練法 33 / 己に克ち、努力する習慣を養成する方法 36 / 誘

第二章

苦闘回顧録

47

惑を抑制して揺るがぬ志を鍛錬する方法 38 / やさしいことから難しいことに進
む克己法 40 / 日常で我慢する心を養成する方法 42
第一章要点 46

第三節

志を抱いて故郷を出る 48

父の薫陶くんとう、幼児の日課 48 / 太閤の出世話に感激 50 / すべての人間の手本となる
出世術 52 / 金の力の威光にきっぱり志を決める 53 / 四苦八苦で故郷を脱出 54

第四節

苦戦奮闘 59

六年間の商売人見習い 59 / 太閤の働き方を実行 60 / 独立開業当時の奮闘 61 / 立
身の規範としての三つの誓い 63

第五節

家業の発展 67

一躍、両替組合の幹事に 67 / 「護摩ごまの灰」の狙う旅人 68 / 古くなった金貨の買
い入れの苦心と、その効果 69 / 日本の銀行業の元祖 72 / 銀行が利益をあげる経

營の基本原則 74 / 人一倍勤勞するのが一番 76

第二章要点 78

第三章 出世の本当の意味 79

第六節 堅実が一番 80

すべての人が必ずできる出世術 80 / 就職した人の、立身出世術 81 / 一攫千金が一番という考え方 83 / 十年の仕事は半日仕事 85 / 花よりも実を結べ 87 / 十人十色の旅の運命 88

第七節 勤勞が一番 91

一家の生計が安全であるために必要なこと 91 / 底のない袋をかつぐような勤勞 93 / 地位の昇進にともなうナマケ癖 95 / 墮落に向かう勤勉や努力 97 / 立身出世の根本的な考え方 99

第八節 誠実が一番 102

必ず出世する奮闘の方法 102 / 農民や商人の出世法 103 / 実行する青年と空想する

青年 105 / 自身で実践すべき教訓 106 / 鳴門なるとの鯛たいか奮闘家か 109

第三章要点 111

第四章 悲運予防法 113

第九節 失策や過失の予防法 114

六十年あまりの実行の経験 114 / 実力通りに発展するのが一番 115 / 多くはうぬぼれ根性による失策 116

第十節 病氣および災難の予防法 118

人間の一生における運不運 118 / 病氣予防の心がけ 119 / 災難を予防する、身の丈を知った生活 120

第十一節 非常時に対する準備法 123

身の丈にあった生活を厳しく守ることの困難さ 123 / 貯蓄が行えない者はどうなるか 124 / 一家の家計予算の立て方 125 / 貯蓄に付随する無限の効果 128

第四章要点 130

企業の成功に必要なこと

131

第十二節 企業の成功に第一に必要なこと 132

一にも人物、二にも人物 132 / 辛いことでもやり遂げる人物の資格 134 / 雨宮君の熱い誠意に投資 135 / 大阪での築港に投資した経緯 138 / 東京湾での築港計画の内容 140 / 条件の整った大事業 143

第十三節 企業成功の第三の要件——経営法の観点から 146

苦境にある有望事業 146 / 阪神電鉄が発展した由来 147 / 独占事業の経営法 148 / 安くたくさん売るのが一番という経営 150

第十四節 企業成功の第三の要件——土地を知るといふ観点から 153

旅行の楽しさと、その肝心な点 153 / 地方での条件のよい事業の判断方法 155 / 風土や経済状況の観察方法 157 / 地方の人と、東京や大阪の人の特徴 159 / 近江商人の五つの特色 162 / とても簡単で便利な旅行法 165

第五章要点 168

第十五節 物欲は薄く、情は厚く 170

人生のまことの楽しみ 170 / 有益で無害な修養と娯楽 171 / 累計九十億円の茶入れ 172

第十六節 敵を愛す 174

お金を恵んで、かえって怨まれる 174 / 行員からの誹謗は、天からのいましめ 175 / 敵からの誹謗は、自分を磨くための規範 177 / 損失とは安い授業料 178

第十七節 もろもろの悪をなしてはならない 179

平等院への頼山陽らいざんやうの落書き 179 / 談山神社で禁制を破る 180 / 和尚のいましめを胆きもに銘ずる 182 / わざわざ訪れてみると一片の墓石に 184

第十八節 至誠不動 186

思い切った決断を即座に下すための三つの要件 186 / 揺らぐことのない胆勇の根拠 188 / 誠実さを尽くしたはずの事業に対する誤解 190 / 陛下のお気持ちおもんばかを慮おもんばかった十年計画 193 / 天下あげての罵声や誹謗 196 / 誠実さを尽くした思いは神に通じる 198

第十九節 天を楽しむのが一番 202

天の采配は行き渡っている 202 / 求めないでもくる幸福 202 / 愉快さの条件は質素な生活にある 204 / 草むらで燃え盛る、ひとかたまりの火 204

第六章要点 207

安田善次郎小伝 208

憧れが、人生を決める 208 / 意志の力の發揮 210 / 近代銀行の創始者 213 / 男盛りは八、九十 217

「人の一生は重荷を負って遠き道を行くがごとし、急ぐべからず」

とは徳川家康の箴言(しんげん)(戒めいましの言葉)である。財産をつくる要点もまた同じこと。乏とほしいことは世の常なのだ。決してつらいと思つてはならない。ただ真心をもつて油断せず、休まず努力すれば、最後には、不思議こころざしと志をとげられてしまうものなのだ。

一攫千金など夢にも望んではならない。まともな道ではないからだ。知らないだろうか、投機で得た大金というのは、アワのように消えやすいことを。額に汗して働くことこそ、本当に貴い宝なのだ。わずかなお金も積みあげれば山ともなる。積みあげたお金をうまく活用すれば、ますます集まる。

たとえ富んだとしても、驕おごればたちまち滅んでしまう。守るべきは、身の丈なのだ。年配者を敬い、若い人をいつくしみ、神や仏に失礼のないようおつかえして、法令に従つて

天職に励むのは、子々孫々繁栄し続けるもとなのだ。

財産は泉であり、めぐりめぐって万物を潤^{うるお}す。常に支出を節約すれば、決算は必ず黒字になる。こうなれば親類や昔馴染^{なじ}みに振る舞ったり、やがては国の財政にも役立てるようになる。このようにして泉としての財産のはたらきが初めて完全になるといえるのだ。

大正五年四月

七十八齡勤儉堂
実行道人

勤儉堂と実行道人は、安田善次郎の号―自称―であり、本書は彼が数えて七十八才のときの作。大正五（一九一六）年に刊行された

第一章 学業や事業を成し遂げるには何が必要か

第二節 揺るがぬ志と努力

偉人に共通する特徴

いったん奮い立って志を決めた以上は、どんな困難や障害に遭遇しても、決してその志をひるがえさず、あくまでも困難に屈しない精神で情熱をもつてつき進むこと。これが古来、大事業をなし遂げて偉大な名を残すすべての人物に共通する特徴である。

彼らの性格や行いには、きつと色々な欠点もあるだろう。短所もあるだろう。ひねくれていたり、かたくなだったり、傲慢ごうまんだったり、いやしかったりといったいろいろな弱点もきつと多いだろうが、ただ自己の目的に対するねばりや執念が卓越している点においては、間違いない非凡な特徴があることを見てとることができる。

彼らは、自分がやろうと決心する事業に対して、外界からどんな非難や攻撃が起こったとしても、少しも怖れを知らず、またどんな辛さや苦労があろうと少しもイヤにならず、どんな不幸や悲運、災厄さいやくに出あっても失望や落胆することがない。ただ気持ちを一つに集中して、その目的に没頭し、絶えず努力をして、その志をやり遂げなければ足を止めるこ

とがないのである。

天才、機知、学識、技能、勤勉、誠実、機敏、愛敬^{あいきょう}、好運。これらは人が学業や事業をなし遂げるうえで重要な要素であるとは誰しもいうところだ。しかし、どんなにこれらの要素を完備したといっても、辛いことを耐え忍ぶ不屈の執念と、情熱をもつてつき進む努力とを、その人自身が欠いていたらどうだろう。

これらの人はその事業が順調で、平和のうちは無難に進むこともできるだろう。しかし、いったん逆境に立って悲運に抵抗せざるを得ない場合には、最後には失敗者というしかばねを社会にさらす他はないのである。これらの人に共通する傾向として、何事を命令されてもなかなかうまくこなしてみせることがある。しかし自分一人の腕では、結局は何事をもやり遂げることはできない。いわば舵^{かじ}なき舟が波のまにまに漂っているように、ただ変化の激しい境遇に身をゆだね、吹いてくる風のまにまにその一生を過ごす他ないのだ。

だから、その事業の内容を問わず、古来の偉人がその大きな事業をなし遂げた根本的な要素は、その才気の鋭さによるものではない。その学識の豊富さによるものでもない。その愛敬のセンスによるものでもない。ただ自分がやり遂げようと決心した目的に対して、いくら挫折しようと思きらめない、揺るがぬ志と、努力を持続する執念が他に抜きん出て

いるからなのだ。

揺るがぬ志と努力を備えた人物の承諾には、千金の価値がある

私の六十年来の経験をもつてしても、微動だにしない決心と、いくら挫折しようと思き
らぬない、揺るがぬ志とをもつて物事に対処しようとする人物の精神ほど確実な信用はな
い。この人物が一度きっぱりした決心で、

「ハイよろしい承知しました」

といえ、この一言はいかなる証文よりも、いかなる担保よりも、はるかに安心ができ
る。「いちだくせんぎん二諾千金の重みあり（確実に約束を守る人物の承諾は、千金の価値を持つ）」とは、本当
にこのような人物の決心において、初めて見る事ができる。

なぜかといえ、この人が一度きっぱりした決心で、ある事業に着手したとなれば、た
とえそれがどんな難事業であったとしても、決心するそのときにもはやその事業の大半は
やり遂げたものだからだ。

というのは、この人がいったん着手すれば、その事業の途中でたとえどんな失敗や打撃
を受けたとしても、そのために責任を回避するようなマネを絶対にしないのはいうまでも

ない。むしろ、つまずいた石をひろってすぐにこれを踏み石にして進み、やり遂げるまで止めないのである。

だからその事業に対して、周囲からどんな非難や妨害が来ようと、またその進路にどんな困難や障害が起ころうと、少しも気にするところがない。ただその目的に向かって一直線に猛進するだけなのだ。その進路の困難さに対して「はたして成功するのだろうか」とためらったり、疑ったりするヒマもなく、その進路が山であるにせよ、川であるにせよ、ただ「どうやって進むのか」という思いだけで、つき進むのである。

だから、このような人物がやろうと決心したところを止めようとするのは、いわば太陽の昇るのを止め、潮が満ちるのを止めようとするようなものなのだ。まったくムダなことだと誰もが承知しているから、この人の進路を妨害する位置に立つ者は、自分から避けてその道を開かざるを得ない。揺るがぬ志と努力とを備えた非凡な人の進路は、すべてこのようであるから、その決心に対して事業の内容を危惧する必要などまったくない。

要するに困難とか、苦痛とか、悲運といったものは、志がもろく、努力できない者のグチに過ぎないのだ。揺るがぬ志で困難に屈せず努力できる者の進路には、困難もなければ悲運もない。むしろ悲運を転じて幸運とし、困難を変じて幸福としてしまえるのが、意志

の力の絶妙な働きというべきものなのだ。

大きな希望や抱負の数々を抱いて、成功の幸運に向かつて出発する人々が、むなしく失敗の悲運のなかでその生涯を終えるのは何故であろうか。学問がなかったためであろうか。技術や能力を欠いていたためであろうか。資金が欠乏していたためであろうか。たとえそれらが原因の一端であったとしても、その根本にまで遡れば、どんな困難にも挫けない意志の力を欠いていたことに、原因を帰せざるを得ないのである。

志がもろく、実行力のない者の共通点

志がもろく実行力のない者の通弊として、私が今日まで目撃した多くの実例について、その著しい特徴をまとめると、おおよそ次の六項目に列挙できよう。

第一、志がもろく実行力のない人は、困難な事件や紛糾したり錯綜したりする事柄に出あうと、すぐにあわてふためいてしまう。それに応じた適切な処置や手段を講ずる余裕を持たず、すぐに打ち負かされたり、挫折して、ついには嫌になつて逃げるしかできなくなつてしまう。これに立ち向かつていく勇氣と忍耐力とを奮い起こすことはできないのである。

第二、志がもろく実行力のない人は、常にその行為に規律がない。日々のささいな振る

舞いですらいい加減で、したがってその精神には快活さがなく、愉快に元氣よく日々の業務に当たることができない。帳簿などの取り扱いも乱雑なので、執務には素早さを欠き、しかもその態度や精神は、常に騒々しくて落ち着きがない。

第三、志がもろく実行力のない人は、決断力に乏しい。一度決心してもすぐに心変わりし、あるいは迷って、むだに用心深く何度も考え直し、それでもなお決めることができない。しかも始めたと思つたらすぐに止め、迷いに迷ってムダに頭を悩ますばかりである。そのうえ過去のことを懐かしむ気持ちが深く、過ぎ去ったことにクヨクヨして気持ちをすり減らすことが多い。

第四、志がもろく実行力のない人は、欲望に打ち勝つことができない。そのうえ移り気なため、たとえば衣類や家具そのほかの持ち物まで、流行している新しいものを追い求め、あるいは不相応に外見を飾ろうとする弊害がある。自分の家の家計においても、あらかじめ計画した収支を厳守することができず、ついには財産を売り払ったり、財産がなければ借金をして身の破滅を招くのである。

第五、志がもろく実行力のない人は、自分の意志を表明したり、断行することができない。そのために、不測のわざわいを招いてしまう。たとえば知人や友人などから、手形の

裏書きや証書の連帯保証などの依頼を受けて、断るに断わり切れず判を押し、ついに後日、大迷惑を招いてしまうのである。

第六、志がもろく実行力のない人は、何事もおそれぬ思い切った行動や、自分の判断による積極的な行動に打って出ることができない。このため取引のうえでも常に人に後れをとり、いわゆる「ひけをとりつつ（相手に劣りながら）」商売するのが常である。はなはだしい例になると、銀行の支配人や、貸付係などを務める者が、得意先の信用度が不十分だと知りながらも、情実からられて危険な貸し付けをしたり、または延期を承諾してしまうことがある。その結果多大な損害をこうむることが多いのである。

志がもろく実行力のない人の通弊をまとめると、だいたいこうした点に帰すると思う。もちろん各個人おのの弱点や短所を列举すれば、際限もないことであろう。しかし共通する弊害がみせる著しい特徴とは、これらの各点なのだ。

天才の末路、鈍い人の成功

立ち居振る舞いがすばしこく、学業優秀で、才気も拔群、将来もつとも有望な青年として多大な望みを託された秀才の多くは、かえって平々凡々としてなんら成すところなく、

時には悲惨な失敗者として一生を終えてしまう。ところが凡庸で鈍く、とうてい将来の望みなど託せないと見限られていた青年が、かえって最後には大きな事業を成し遂げて、素晴らしい名声を得るような実例は世間に多々見るところである。この意外な結果をもたらす原因は、何にあるのかを考えてみなければならない。

これら鈍い青年に共通する特徴として、きわだった忍耐力と自信に^み充ち^{あふ}溢れていることがある。特に自分の目的に対する執念はきわだつていて、どんな困難や苦痛に直面しても心を動かさない様子はまるで愚かなようであり、ただ一心に専念して自分の向かうところに直進するばかりで、臨機応変な対処などほとんど知らないように見える。ところが、この特徴がついには凡人を偉人にしてしまうのだ。

逆に、才気に恵まれた人物は、決まった目的に執着することがまったくできない。わずかな障害や困難にも、たちまち気が変わつて方針を変え、あるいは右に、あるいは左にと、ついに何もやり遂げずに一生を終えるのである。これでは、どんな大天才といつても、我慢強い努力をささえる意志の力を伴わない天才では、何の値打ちもないではないか。意志の力を伴わない天才を賞賛するのは、いわば積みあげた^{かし}樫の実を指して、「樫の森林だ」というような愚かさ、何も変わるところがないのである。

凡人が大成する一番の要素

いかなる事柄に対しても、自分の目的以外であればきっぱり受け流し、少しも気持ちを振り向けず、わずかな動作に必要な微力ですら他のことには振り向けないこと。そして、すべての心、すべての能力、すべての力をその志すところに集中すること。これがどんな凡人でも必ず大成できる秘訣である。

いろいろな誘惑のために、あるいは左、あるいは右と、少しもまとまらない散漫な努力。あるいは決まった目的のもとに、継続することのできない切れ切れの努力。あるいは一心に専念してまっすぐに進むことができない集中力なき努力。これらの努力は、いかに大きいとしても、結局は成功の水準に達しないムダに過ぎないのである。

世の中には、奮闘家や勤勉家はとて多いのであるが、大成功した者はとても少ない。この原因は、何であるかを考えてみなければならぬ。

どんなに精巧な水車を作っても、そこに流れ込む貯水池の水が外に漏れてしまつては、せつかくの水車も何の役にも立たない。だから、水車に予定どおりの働きをさせるためには、まず多量の水が漏れている堰せきの穴をふさいで、貯水池のすべての水が水車を回転させるようにするしかない。

世の中の奮闘家や勤勉家の多くも、せっかくの奮闘や勤勉を決まった目的や進路のもとにしつかり集中できず、その大部分が支離滅裂に散乱してしまうので、何らの効果もあげることができないのではないか。たとえ一つの事業に向かつて進みつつある間にも、あるいは迷いを生じて左右をうかがい、あるいはわずかなつまずきや障害のために疑い、ためらい、あるいはいろいろな欲望、嫉妬、空想のために苦しみもだえ、心をくだくなど、ムダに多大な気力と体力を目的以外のことに消費してしまうのではないか。

これはとりも直さず、水車に注ぐ水を貯める堰が漏れているのである。一つの事業に成功したいと思う者は、必ず自分の気力と体力、能力を貯蔵し続けて、けつしてムダに他のことに消費せず、そのうえで全力をあげてただ一つの目的に注力すべきである。雨だれの水でさえ、とぎれなく落ちればついに岩をも穿うがつではないか。すべての心、すべての能力、すべての力を一つのこと集中して止めることがなければ、その熱い心だけでどんな大きな目的にも到達できないはずがないのである。ライオンが小ウサギを捕らえるときでさえ、しとめるのに全力を用いるというではないか。どんな天才でも、偉人でも、一度に二つのことができる道理はない。たとえ一度に多量の仕事ができたとしても、それは人間が大成できる道ではないことを、私はここに断言する。一つのこと以外は、どんなささいなこと

でも手を離さず、気持ちを移さず、ただ一心に専念して努力を続けたことこそ、偉人が偉人であり、天才が天才であり得た理由なのだ。

本当の成功と朽ちない生命

世のなかにはいろいろな人がいて、いろいろな事業がある。しかし、ムダに多種多様な仕事に手を出し、多種多様な事業に関わっているような人のことを、私は必ずしも成功者とは認めない。

生涯のうちでただ一つの事業で構わないのだ。何十年の間、黙っておのれの気力と体力、能力を貯め込んでおき、その気力と体力、能力のすべてを傾けて最後にただ一つの事業をやり遂げたという人がいるなら、その事業がどんな種類のものであろうと、大きいにせよ小さいにせよ、その人物は成功者といわれなければならないと思う。

なぜかといえば、人間がこの世に生まれて、もし何ものをも後世に残すことができずに死んでしまったとしよう。こうなると、いかにその人が苦勞をしたといつても、修業を積んだといつても、五十年ないし七十年の生涯はまったく意味のないものになってしまう。これらの人が、たとえ百年や千年の寿命を保ったとしても、結局それは「醉生夢死すいせいむじ（何も

せずに、ムダに一生を過ごすこと）、カゲロウが朝に生まれて夕方には死んでしまうのと何ら異なることはないのである。

ところがここで、自分の生涯の気力や体力のすべて、能力のすべてを打ちこんだ一事業を築きあげたでしょう。たとえその人が長い寿命を保つことができずに三十や四十で早死にしたとしても、その人の生命はその事業の続く間は存続しているのである。幸いにもその事業が、少なからず人の利益となり、世のなかの利益となるものであれば、その人の生涯の努力は幾千万年となく光を放つのである。

これは人生の立派な成功者というべきものではないか。

もちろんこうした生き方は、人生の本当の意義や役割を果たしたに過ぎないのであって、むしろどんな人でも取らなければならない道ではある。けれども、世のなかの大多数の人が「酔生夢死」で一送るなかで、少数の異端者になるわけだから、私はこの人を指して人生の立派な成功者と呼ぶのである。

いかに名声を博し、ぜいたくを極め、権勢をほしのままにできる生涯であっても、「その人の生涯の努力」を伝える何かが将来に何ら残らなければ、その人は死とともにこの社会から消え去るのである。鳥は自由自在に空中を飛びまわり、魚も自由自在に水中を泳ぎま

わる。同じように、おのおのが本能や欲望をただほしいままにして、一時の幸福や快樂の追求を根本の目的として暮らすのが人生であるとすれば、この人生やこの社会は、実に値打ちのないものといわなければならぬではないか。

それなのに世のなかには、将来に残すべき何ものも築き上げずに死んでしまう者が多いのである。何ものかを残そうとして、一生苦しみ苦闘しながら、ついに何ものも残せず死んでしまう者も少なくないのである。だから私はいうのだ。たとえ何十年かかっても、ただ一つの事業でいい、自分の生涯を記念するに足るだけの事業を築き上げて死ぬ者はこの人生の成功者である。そして、この成功者になるための道はどのようなものかというところにも幾度となく述べたように、自分のすべての心、すべての能力、すべての力をあげて志す目的に直進する、ただこの一路である。

天職の完成と意志の修養

コロンブスのアメリカ発見の航海中における日記には、
「この日、われらはただ西へ西へと航海するほか何もしなかった」

という言葉が幾度となく繰り返されていた、と聞いている。はなはだ簡単な言葉である

が、このわずかな言葉のなかにコロンブスの揺るがぬ決心と、厳しい状況のなかでの勇ましき、たとえ死んでも止めない覚悟がありありとあらわれている。

勇気もくじけ、希望も絶えて、進めば進むほど疑いや懼れ、不安の気持ちが強くなり、ついに進路の変更を強要し続けてくる——そんな船員ばかりのなかで、ただ一人毅然として最初に志した気持ちをしつかり持ち続けた、揺るがぬ不屈の意気が、このわずかな数語のなかに遺憾なく書きあらわされている。この意気と決心が、コロンブスにアメリカ発見というとても困難な大事業をやり遂げさせたことはいままでもないのである。

「一つの仕事を営む者は七人の家族を養えるが、七つの仕事を兼務する者は自分一人の身も養えない」

という古い言葉もある。あるいはまた、

「器用者は貧乏者」

ということわざもある。いささか極端かもしれないが、すべてに器用な者は一つのことですら大成できないことは、世間の多くの事例に照らし合わせてみても明らか事実である。結局はその多くの才能を一点に集中することができないからなのだ。千両役者はいろいろな役は務めない。一点に尖っているからこそ、とが 錐もいろいろなものを突き通せるので

はないか。

多くの仕事に通じることは、一つの仕事に通じるよりも、はるかに多くの労力と苦心とを必要とすることは明らかなことだ。それなのに世間には、多くの仕事に通じる人は多いのに、一つの仕事に秀でる人はとても少ない。これはどういうことか。つまりは意志の力を身につけることが普及していない結果なのではないか。多くの仕事を横断すれば、変化も多く、興味も多く、どんなに志がもろく実行力のない者でも堪えやすいものだ。しかし、雑念を交えずに十年一日のごとく一つの仕事に従事するというのは、よほどしっかりした意志力に富む者でなければできない。

これが世のなかに成功者が少なく、失敗者が多い唯一の原因であると私は思う。

だからこそ、世のなかの多くの人に天職をまっとうさせて社会的な役割に尽力させ、悲惨な失敗者や不遇者を少なくする道は、主として意志の力の身につけ方を普及させることにあるといわなければならない。これが私がこの本を刊行するに至ったささやかな志の一つである。

第二節 揺るがぬ志の養成法

厳格だった家庭での訓練法

人々が、志がもろく実行力のない人となるか、または揺るがぬ志で困難に屈せず努力できる人となるか。そのわかれる理由について、私が自分の経験からひるがえって考えてみると、

- ・ 第一の原因は、人々の性質によるが、さらに、
- ・ 第二の原因は、家庭の家風および父母の訓練法のいかんによる
- ・ 第三の原因は、幼い頃の自分の心がけや、習慣による

ということであるように思われる。私には何ら人にまさるような学問もない、才知もない、技術や能力もない。けれども、ただ己おのれに打ち克かつ意志の力や、我慢強い意志の力を身

につけた一点においては、決して人に負けないと信じている。富山の田舎から飛び出して、一人の丁稚として奉公し、商人として身を立てて、今日に至るまでの六十余年の奮闘は、これを一言に縮めるなら「己に打ち克つ意志の力や、我慢強い意志の力を身につけるための努力」に他ならないのである。

私が、この心がけで一生を貫き通すことのできた大本にさかのぼって考えてみると、主として幼い頃に厳格な家庭で育てられ、きわめて厳しい父のもとで鍛えられたおかげだといわなければならぬ。

父は常にいっておられた。

「人間が、ムダに衣食だけして、何も成し遂げないまま一生を過ごすだけであれば、動物と何の違う所があるのか。規則正しい生活のもとに、それぞれのすべての能力を出し切つて、一身一家の繁栄や発展を心に誓う点において、万物の霊長という本来の役割が果たせるのである」

こういって、あくまで勤労を一番とする考え方をとっておられたのである。

私の幼い頃の生い立ちについては、別項にて一通りお話をしたいが、私の家は代々前田家の藩士で、小禄ながらも一家の者がとにかく暮らせるだけの禄をもらっていた。武士の

家ということもあり、家庭の家風は昔からきわめて厳格であった。そのうえ父はとても律儀な人で、たとえ思いもかけない災難に出遭っても人に迷惑をかけず、

「人のお情けをこうむらずに独立独歩で対処できるように普段からの準備を立てておくことは、人間第一の努めである」

として、必死の努力を怠らない人であった。

父は一年中、四季を通して朝から晩まで田んぼに出て農作業に励まれていた。私も七、八歳の頃から、早朝うす暗いうちから田んぼに連れられて行って、朝の八時頃には帰って食事をする。それから寺子屋に行つて、帰ってくればまた田んぼに出て日暮れまで働かされて、夜は読書や習字の復習をする。

これが私の幼い頃の日々の変わらぬ日課であつて、どんな夏の暑い日も、冬の寒い日も、一日もこの日課を怠ることは許されなかつた。幼い頃には多くの友達と、ムダな遊びで日を送りたがるものであるが、私にはほとんどそういうことはできなかつたくらいに、父の厳格な訓練のもとに育てられた。このことが、私の己に打ち克つ意志の力や、我慢強い意志の力を養成する根本となつたことは疑うまでもない。

己に克ち、努力する習慣を養成する方法

揺るがぬ志を養成するための眼目は、自分がしなければならぬことに対しては、たとえ欲すると欲せざるとを問わず、好むと好まざるとにかかわらず、しなければならぬときには必ずできるような心を練っておくことである。私の経験からいえば、この心がけは人々の精神修養のうえできわめて重要なことである。しかし、決して容易なことではない。

ではどうやってこのように心を練ることができるとかという点、これには二つの方法がある。

- ・ 第一は、日々の繰り返しによって習慣を作ること
- ・ 第二は、楽しさを持って誘惑に打ち克つこと

この二つの方法が一番よいように思う。

では第一の、日々の繰り返しによって習慣を作る方法はどのようなものか。私の経験からいえば、意志の力を身につけることは、他の芸術や技術的な力を身につけることとほとんど異なるところはない。

たとえば泳ぎの術を学ぼうとする者は、日々海に飛び込んで実際に泳ぐしかない。走る術を学ぶ者は、やはり野原に出て実際に何回も走って上手になる他はないのである。意志の力を練って、揺るがぬ志で努力を続けられる力を養うにも、日常のことにおいて絶えず己に克つ練習をして、飽きて放り出したくなる気持ちが起こっても、無理にこれを抑えつける。そうして、規則正しく働く習慣を養っていくのである。

意志の力は、練れば練るほど強くなるというのは、すべての経験者の一致する述懐である。私の経験でも、十三、四歳の頃から一七、八歳の頃まで毎日、軍事や合戦の本を筆耕（本などを筆写する仕事）した。毎日三、四十枚ずつは書いた。初めのうちはやはり飽きることもあった。必ず日に三十枚ずつ書くという決まりを立てておいても、五枚か十枚書いてイヤになることもあったし、遊びに出たいという気も起きるのであった。しかし、それを抑えて書いたのである。必ず決めた通りを実行したことが習慣となって、ついにはそれだけのことはぜひやらなければ気がすまないようになった。さらに進んでは、それを努力することが何でもないようになってしまった。そのおかげで規則正しい生活をする習慣もでき、またいったん決心したことは必ずやり通すという根気を養うことができた。

この経験から私はいうのである。揺るがぬ志を養成する第一の方法は、日々の繰り返し

によつて習慣を作ることである。

誘惑を抑制して揺るがぬ志を鍛錬する方法

第二の、樂しさを持つて誘惑に打ち克つという方法はどのようなものか。いったん決まりを設けて、その決まりの通りに必ず努力し、ついには習慣とし、少しも苦痛を感じないまでに至るには、決して容易ではない。多くの場合、せつかくの決まりもすぐに破れてしまふのである。

たとえば、酒飲みが禁酒の誓いを立てるが、せいぜい五日か十日くらいは辛抱するけれども、すぐに何らかの口実のもとに破つてしまふ。この困難な克己こつきしん心を養い上げようとするには、いったん決心した決まりを破ろうとする誘惑に打ち克つだけの樂しさをもつてかかる必要がある。

たとえば私が軍事や合戦の本を筆耕し続けられたのも、写しながら軍事や合戦の本を読むのが非常に面白いからだつた。友達とムダな遊びをするよりもこの方が面白いし、そのうえ筆耕料がもらえる。この樂しみがあるから、とうとう五年あまりというもの、日々三十枚、四十枚の筆耕を通して、根気を養い、規則正しい生活をする習慣を作つた。

つまり一般の心得としては、決めたことを努力するにあたって、努力した後の結果と、それを破った後の結果との利害得失を考え合わせて、

「努力した後の結果はこういう利益がある、こういう楽しみがある」

「決まりを破った結果はこういう損になる、こういう害を受ける」

ということを常に念頭に置いていけば、少々は苦しくとも自然に励みが出る。辛抱して努力することに面白味が出て、それを破ろうとする誘惑を自然に抑えることができる。これが揺るがぬ志を養成する第二の方法である。

自分に克つというのは非常に困難な事柄であって、凡人に簡単には行えないのが普通である。しかし、

「それを自分は簡単に実行することができた」

という点に愉快さを感じるように、楽しさの気持ちを養っておくことも必要である。たとえば「タバコを止めることは困難だ、困難だ」といわれている。しかしそれを自分は簡単に止めることができたというのは、自分の克己心の強さの結果であった——そういうことに、愉快さを感じるようにしたのである。そうなればタバコをやめたということよりも、自分の克己心がすべての誘惑に打ち克つたという点にいつその励みが出る。人が「困

難だ」といつている事業も、自分の力なら必ずやり遂げられるという自信力が出る。この自信力が、人々を向上させ、発展させ、その地位を高め、その器を大きくする基もととなるのである。

やさしいことから難しいことに進む克己法

一つの事業をやり遂げるには、まず終着点であるところの目的を立てて、その目的に進む順序を定め、一步一步進むというのが私の主義や方針である。順序を定めて進むにあたっては、一定の基準を立てて、その基準は堅く守って動かないというのが、揺るがぬ志を養成するうえで大切な点であると思う。そのとき、基準の立て方が大切であって、なるべく自分の現在の地位、境遇に見合った、実行しやすいところから始めるようにする。「この程度なら実行できる」というところに基準を定めて、最初は試験のつもりで始めるのである。

ところが世間には、往々にして何かに感激したあまり、とても長くは実行できない高いレベルで基準を立てて進もうとしてしまう者がいる。日がたつて感激の度合いが薄らぐにしがたつてやる気が鈍り、ついに挫折する者が多い。私は決してそういう飛び離れた考え

を起こしたことがない。

一つの例をいえば、私が初めて独立して鯉かつおぶし節店を開いたときの定めはこうだった。

「店の収益の十分の八で一家の生計を立て、自分の所有する今の財産の十分の一を超えた家屋は購入しない」

こんな基準を定めたのだ。当時、私は年も若く気力があつた。しかも立身出世にはやること、燃えるようであつたから、生活費は十分の五くらいにしようかとも考えた。十分の五でもたしかにできたのであるが、しかし「これは少し無理であろう」と思い直して十分の八にした。

この十分の八という身の丈をわきまえた生活法は、ずっと通して今日まで継続している。十分の八であつたから今日まで一貫することができたので、もし十分の五としていたならば、どんなつまづきを引き起こしたかもわからない。

私が禁酒の誓いを立てたときもそうであつた。やはり独立営業を始めたときに、禁酒の誓いを立てたが、そのときに酒とタバコを二つとも一生禁じようと考えてみた。しかし、これはやや極端であるかもしれないと思ひ直して、タバコは一生禁じることにし、酒は五年間だけ禁じることを誓いに立てた。タバコはそれ以来、今日まで禁煙を通してゐるが、

酒はその後五年の期限が来て禁酒を解いた。

生まれつき、比べるものがないほど好きな酒であったけれども、五年も禁酒してすっかり酒量が減少した。初めて飲むと最初はさかずきの二、三杯も飲めばすぐに酔ったが、だんだんと酒量が増えて、少々の酒では酔えなくなってしまう。これではいけないと思って、ピタリと止める。二か月も止めてさらに始めると、やはり最初はさかずきの二、三杯で酔う。それから次第に量が増える。量が増えたとまたピタリと止める。こういう飲み方で今日まで少しずつ飲んでいる。まったく辛くない。普通の人にはこういうことは容易にはできないことであろうが、これはつまり、克己力を十分に身につけたおかげであると思う。だから最初は自ら実行できる程度に基準を定め、その基準によってある期間実行する。それが次第に習慣となつてまったく苦痛を感じないようになれば、さらに、第二步に進んで基準を立てる。このように徐々に進んでいけば、ついには何ごとといえどもできないこととはなない志、偉大なる揺るがぬ志を養成できるようになるのである。

日常で我慢する心を養成する方法

すべての人間がこの世に生きている間は、日々に直面する物事に対して、すべての力、

すべての能力を注いで誠心誠意尽くすというのが、本当の意義ではないか。その事柄がいかに軽微で、ささいなことであっても、それを誤魔化したり、それをあなどっていいという道理があるはずもない。

それと同時に、どんな事柄でも、人が我慢して耐え忍んでいることは、自分にも辛抱できかない道理はないはずだ。ところが世間には、人は我慢して耐え忍んでいるにもかかわらず、その辛抱ができないことを当然だと思っている者が少なくない。卑近な例でいえば、日々の入浴の湯加減には、「熱い湯が好き」という者がいれば、「ぬるい湯が好き」という者もある。辛抱すれば入れないほどではない湯加減であるのに、わざわざ人手を借りてぬるくさせたり、熱くさせたりして、ちょうど自分の好みに合う加減にしないで湯に入らないというこだわりを持つ者がいくらかもいる。グタグタと煮立っている湯には入れずもないが、もし人が入っている湯であるならば、自分には少々熱いと思っても、黙って入ってもよくはないだろうか。なぜわざわざ人手を借りて水を汲ませるようなムダな手間を取るのだろうか。これはつまり、どんなささいなことでも、誠心誠意ですべての力、すべての能力を尽くすという気持ちが薄い結果、己に打ち克って我慢するという心がけが欠けているからに他ならないと思う。

学問において人より優れたところがあるわけではなく、知識や技術的な能力において人に勝ったところがあるわけではない凡人が、それらの人に劣らない働きをしていく道はどのようなものなのだろう。ただ日常の物事に対して、昼夜絶え間なく辛抱すること、それ一つなのだ。機敏な人が一時間で仕上げるところを、自分は一時間でできなければ二時間働いてこれを補う。これが私の今日まで続けてきた「努力を一番とする考え方」の根本的な意味なのだ。

たとえば「これこれの仕事は今日中にぜひ仕上げる」という予定であれば、たとえどんなに都合が悪くても、どんなに疲れていても、必ずやり遂げた。どんなに夜が遅くなっても明日に延ばすことは決してしなかった。「あまりに疲れたから」とか「夜があまりに遅くなったから」という理由で、今日の仕事を明日に延ばす人が世間には多い。しかし、結局は仕事に対する誠心誠意が足りないためにそうなるのだ。本当に誠心誠意ですべての力、すべての能力を尽くしてことに当たるといふ命がけの覚悟があれば、一晩や二晩くらい徹夜を続けるくらいの辛抱ができないはずはないのである。いわんや湯が少々熱いからとか、ぬるいからといって、わざわざ人手を費やして何とも思わないというのは、何たる不心得であるか。

つまりはこの我慢の気持ちや辛抱する力がないために、つい今日の仕事を明日に延ばしてしまふ。明日の仕事をあさつてに延ばしてしまふ。日々の仕事に追われ通しになるから、日々の仕事がみな間に合わなくなり、愉快に働けず、氣力に余裕もなくなる。ついには生涯思うだけの仕事をやり遂げることができず、もたえ苦しむなかで一生を終えるということになってしまふのである。これははなはだ小さなことのようなものであるけれども、人々がこれによって凡人であるか偉人であるか、成功者であるか失敗者であるか、という分岐点であると思わなければならない。要するに、日々に直面するいかにささいな物事であっても、誠心誠意をもって全力を尽くすという精神が、普通の日常における我慢の気持ちや、辛抱できる力の根本であつて、これがすなわち人々が大事業を完全に成し遂げるもつとも肝心な点なのだ。

第一章 要点

- どれだけ才能や学歴、資金などを備えていたとしても、己に打ち克つ意志の力と忍耐力を身につけていない人は成功者にはなれない。

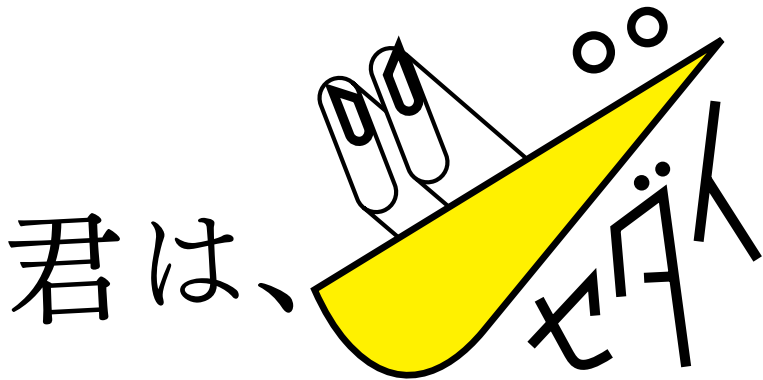
意志の力を持つ人は

- 責任転嫁しない。
- 「できるかできないか」ではなく「どうやってやろうか」と考えるので信用できる。

意志の力を身につける二つの方法

- 日々の繰り返しによって習慣を作る。
- 得られる成果を常にイメージして、努力することを楽しく思えるようにする。

- 今日できることを明日に延ばすな。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!